

# シラスウナギが多く採捕された年はどんな沖合環境だったのか？



## 【研究課題名】

河川及び海域での鰻来遊・生息調査事業

## 【実施年度】 平成28～30年度

海洋・生態系研究センター

生態系モデルグループ

沿岸・内水面研究センター

沿岸資源・生態系グループ

青木一弘・亀田卓彦

山本敏博

## ■目的

ニホンウナギの産卵場は我が国から遠く離れた西マリアナ海嶺にあり、そこで生まれたウナギは渦や、北赤道海流や黒潮に流され、我が国に来遊すると考えられています。シラスウナギの採捕量は年毎に大きく変化することが分かっていますが、その変動要因は分かかっていませんでした。本研究では、精密なシラスウナギ採捕量のデータが長期的に蓄積されている宮崎県大淀川に着目し、シラスウナギが多く採捕された年の沖合環境の特徴を見出すことを試みました。大淀川は日向灘に流入する一級河川で、その河口沖には黒潮が流れ、黒潮変動が直接的に河川環境に影響すると考えられます。

## ■方法

大淀川で調査研究を行っている（一財）宮崎県内水面振興センターや宮崎県水産試験場と協力して現地調査・データ解析を行いました。解析対象期間は2002～2014年です。

## ■結果

現地調査により、2002年度漁期（11～2月）の採捕量が他年度よりも格段に多いことが分かりました。その年の漁期中、沖合を通過する黒潮が例年（平均的だった2009年と比較）よりも河口の遠方を通過していました（図1）。2002年度漁期は気温が低く、漁期中の沖合水温も解析対象期間中最も低かったことが分かりました。低水温環境がどのようにシラスウナギの来遊を促したのかは未解明ですが、河口およびその周辺の流動構造の変化やシラスウナギの遊泳行動に好適に寄与したのではないかと考えています。

## ■波及効果

シラスウナギの来遊機構解明につながる沖合海洋環境の特徴を見出すことができました。今後、来遊機構が解明され、来遊予測手法の構築につなげられることが期待されます。

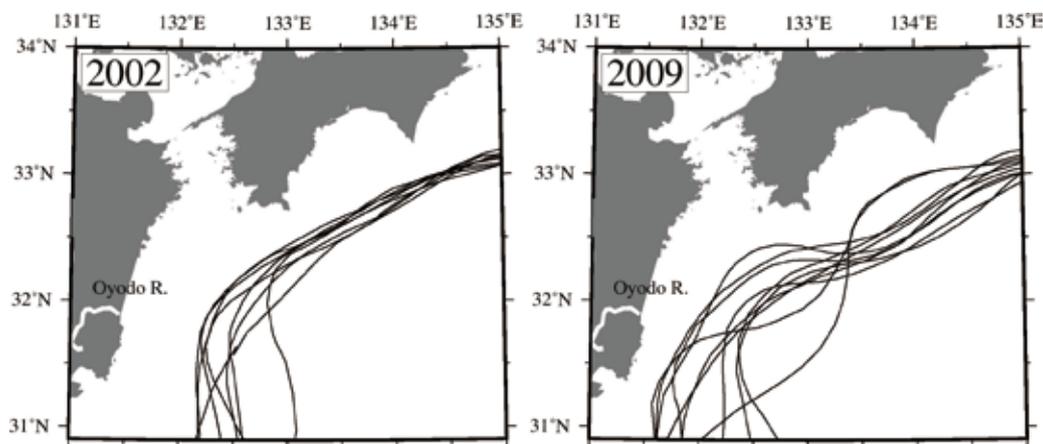


図1 2002年(左)と2009年(右)の黒潮流軸位置